

ならないということになるのです。

これはキリストの人間に対する基本的な考えなのです。

このような人間に対する考えをもって、子どもを考え、幼児の保育をして参りました。ですから、わたしたちは、誰々の子どもだから、どのような子どもだから、ということには関わりなく、その子どもを神からおあづかりした一人の人間として尊重し教育しなければと考  
えております。

私たちは、吾が子だから愛する、という親のエゴイズムの愛をのり越えて、神様からおあづかりした子どもとして、その子どもの成長に責任を感じ、その責任が完うされるように祈る姿が世の母親すべてにほしいものだと思っています。

## どこが間違っているか

ご存知の通り、幼児期は人間一生に於ける初歩的段階にあるものです。即ち、人間は幼児期・青年期を過て大人になって行くわけです。

ところで、ひと昔前までの学校教育というものは、大人中心で子どもを一個の人間として尊重する教育ではありませんでした。子どもは、大人になる以前の前段階的・未完成的存在で、一段低いところにあるものとして大人にとりあつかわれて来ました。そこでは、幼児は幼児として完成された一個の人間として、幼児そのものに与えられている能力を、充分伸ばしてやるという配慮に欠けていたのです。このことに気づき、幼児は幼児として神から与えられている能力を伸ばしてやることの必要と責任とを強く感じ、それを実践したのが、幼稚園の創始者フレーベルであり、ベスタロッチであり、またロバート・レイクといった人々であります。

彼らは皆キリスト者でした。フレーベルは幼児が幼児として完成するために、神様が与え

て下さっているものがある。それは自然の中にある三角・四備、丸等の様々のものであり幼児はこれらのものを目づと用いて、幼児自身の能力を開花して行くと考え、それらを神の賜物と呼びました。

それ故に幼児は、これらの賜物を用い、いろいろなことを経験し成長するのであって、親は只それをよく指導し、訓練の心をもって見守ることを求めたのです。そして特に、幼児たちが、神さまの賜物の只中で己え自身の可能性を開花させている姿を「キョウガクセン幼児の花園」即ち幼稚園と呼びました。

ところが、明治九年お茶の水女子師範に日本ではじめての幼稚園ができた時、こうしたフレベルの深い幼児教育についての精神を悟り知ることなく、只積木が上手にいくつ積めるか、折り紙が手先をきょうにして、うまく折れるか、といった子どもに技術的な面だけを教えた結果、教育というものが技術の修得・知識の修得ということになってしまったのです。こうした傾向は、その後今日まで、幼稚園の馬鹿げた漢字や英語の暗記教育から大学の教育過程になるまで引きつがれ、知っているか、知らないか、出来るか、出来ないか。といっ

たことだけが常に問題となり、神から与えられた人間各自の能力を正しく育てて行こうとする、人間を尊ぶ教育が失われ、技術と知識を持ったロボットのような人間が作り出されその規格に適合出来ない人間は能力なしと評価され、切り捨てられる状況をつくり出してしまいました。この考えはいよいよ激化し、ついに学生の造反となって暴発し、いよいよ今日の教育は混乱の中にのめり込んで行く有さまであります。

けれど、このような事態にたち入ったことは、当然といえば当然であったわけです。

私たちは、今こそ私たちの教育を私たち自身の中にとりもどし、人間の真の平和と幸福のための教育の在り方を根本的に再建する必要を覚えます。

## わが子の自主性を育てる

幼児期の子どもには、自己中心性による、わがままな行動が多いので、彼らをとりにまいて、いる大人たちは、その行動を禁止す命令を、つい多く発しがちになります。

しかし、禁止命令ばかりを出していると、子どもは自分の行動に自信がなくなり、おどおどびくびくした子どもになってしまい、自から進んで積極的な行動を示さなくなってしまいます。

「いけません」、「だめ」……等の禁止命令ばかり出すのではなく、指示、促進命令を与えることにより、親は生活の中で自然に子どもの自主性を育てることが出来るものです。

例えば、花をちぎろうとしている子どもに、「ちぎるな」という禁止命令を出すと、子どもは親のキツイ恐ろしい顔を見て、その手を引っ込めると同時に、花をつもうとしていた積極的な意欲までも引っ込めてしまいます。花をつまなないよい子であった代りに、意欲を打ちのめされた弱い子になってしまいます。これではいけません。親は「ちぎってはいいませ

んよ」と言いつつ、花をちぎろうとした子どもの手にシャベルを持たしてやって、このシャベルで「ここに、こうして穴を掘りなさい」と言いふりに言っていてやることにより花をつまみせず、積極的意欲をも育てることが出来るわけです。

子どもは、出来得るだけ、あぶなくない戸外で遊ばせるようにしたいものです。家の中にいてテレビの前に座って漫画や怪獣などをみていると、依存的・受動的な子どもになりやすく、自主的・独創的・創造的な面が萎われにくくなる傾向が強いです。

同じような年令の友達と、安全な家外で、子どもたちの自発的な意志にもとずいて、自由に活発に遊ぶその中で自然に子どもたちは、いろいろの経験を積み、話し合いによって観察も深められ、工夫や創造が営まれるのです。また、親の意志でなく、自分の意志によって好きな遊びを選択し、自分で責任をもって行動することも学びます。そして、子ども同志の自由な結合からは、愛と協力とが、自然と生れて来るのです。そこに子どもは、生き甲斐と喜びを強く感ずるのであります。

こどもの自主性を育てることは、親の大切な責任です。しかし、親は時として、その大切

な子どもの自主性を「教育する」という名により又は、「親の愛」という大儀名文により崩してしまふのです。この点、今日の親たる大いに反省してみる必要があります。

(45・6・1)

## こどもの「しりごみ」

困難なことや、少しむつかしいことにぶつかると、しりごみをする、全力を出さない、あつ場合には手を全く出さないので、困難を避けて通ろうとする子どもがいます。

それには、生れつき大胆な子と用心深い子の差もありますが、多くの場合は、親の教育態度によって、こうした性格はつくられるようでありませう。すなわち、親が子どもの面どりをあまりみすぎる、いわゆる教育熱心の親の子どもに「しりごみ子」が多いようです。この場合親は、すぐ子どもの行動について評価的な態度をとるようです。「よい子」「よくない子」

「よく出来た」「よく出来なかつた」等といつても子どもを評価している。それも主として結果にもとづいてなされる評価であり、このような親の関心は「よい結果」なのです。

このような親の態度が、子どもに取り入れられ内面化し、子どもは自分の行動を自分で評価して見るようになり、すぐ結果が気になり、失敗しないことを第一と考えるので、ついついものごとに対する関わり方が消極的となり、しりごみにならざるを得なくなるのです。

「この子は、どうして、こんなにものごとにしりごみなのかしら」と案ずる親は、自からの育児態度に反省してみることが第一かと思えます。

(45・7・1)

親は子どもの失敗を

許すようにしよう



学習がすすむために、成長するためには、「失敗の自由が一番大切です。幾度も失敗することにより、成功するのです。正に失敗は成功のもと」であります。ですから、結果ばかりを評価し、気にしては、子どもは積極的に行動することが出来ません。

すること、なすことを一つ一つ評価され、注意されていたのでは、失敗することを恐れ、新しいことにしりごみをし、すべての行動にこの態度が移行して行き、進歩のさまたげとなります。

子どもの「はにかみ」も「しりごみ」と同じ理由によって、人間関係に現れた「しりごみ」現象であります。

親たる者、子どもの生れつきの性質として、かんたんにかたづけずに、自から、子どもにかかわる言動を思い返していただくことをおすすすめする次第です。

## さあ 二学期です

ながかった夏休みは終り、今日から二学期が始まりました。

ほとんどの子どもは、久しぶりに会うことが出来る友だちや先生のことを想い、嬉々として登園してくるのですが、園児のうちには入園当初に退行して登園することを、ぐずったり泣いたりして拒否する子どもがいるかもしれません。

そのような場合、病気の潜伏期だとか、他に何かはつきりした事情のあるときは別として、特に理由らしきものがないのに、このような態度を示す子どもは、おそらく園生活に十分なじむことが出来ないまま、一学期を終えたのでしよう。また表面はなじんでいたように見えていても、心の中にまで不安が残っていたのだと考えられます。

他の多くの子どもたちが、園生活に慣れて喜んで参加しているのに、これらの子どもに、それが出来なかったというのは、そのほとんどが家庭でのあやまった子どもの取り扱いに原因していると言っても過言ではありません。

子どもが、母親から離れるのをいやがって泣いたりすると、母親の方では、それが子どもと自分との愛情の結びつきの深さを示しているかのように思い、満足すると共に、なかに「この子は、私がいなくては何もやれない、だからわたしがやらねば」と思い込んでしまったりします。

しかし、子どもは自分が親に本当に愛されていることを感じ、それに満足しているなら、初めての経験に向っても必要以上に不安や恐れをいだきません。そして、新しい環境に慣れるのもはやいものです。

やたらと親にまつわりついたり、親の姿が見えないと不安になって泣く子どもは、実は親を愛し慕っているのではなく、親の愛に不満を感じ、不信を抱いているのです。自分が母親を離れている間に母がどこか行ってしまふのではないかとか、自分がいけない間に弟ばかり母にかわいがられているのだと、嫉妬を抱いたりする子どもが、どうして母から離れて、嬉々としていられますでしょうか。

二期は、子どもを信じて開放してやりましょう。ひとりの人間として育つ可能性を内に

多くもつ者として、そのあるがままを認め、信じ、歩くのを見守ってやりましょう。

教師一同も、今学期のつとめを一生懸命はげみたいと思っています。

(45・9・5)

## 子どもとの対話

安定感のある円満な人格をつくるためには、子どもが幼いときから、親との心の交流を持っていることが大切であり、そのための重要な手段のひとつが、話し合いであります。それは、たとえ子どもが乳児であっても、必要であります。そして、話し合いは家庭教育の核心であります。

親子の相互理解や心の通い合いは、そうやすやす自然にできるものではありません。つねに崩れやすく破れやすいものであります。ですから、たえず話し合いがつつげられ、子ども

が小さい時は、よけいに子どもの言わんとするところを親はよく聴くことによる話し合いを通して、子どもを正しく理解することが大切であります。しかし、子どもが成長するにつれて、いよいよ話し合いは家庭教育に於ける重要性をまして来ます。

話し合いの重要性は、たんに親が子どもを理解するというに止まらず、親の考えを子どもに伝え、子どもがそれを受けとり、親の生活、人生についての考えや態度を真以て取り入れて行くところにあります。

話し合いは、以上のような役割をもっていますが、話し合いの最も基底になるものは、言うまでもなく愛情であります。

まことの話し合いは、相互にかわす言葉の量によるものではありません。大切なことは、相手を思いやる言葉の質であります。

即ち、時として親子は、相互に相手に対する不満の言葉のなげかけあい、終始することがあります。朝から晩まで、叱ったり、命じたり、何かを教え込もうとしたり、ことさらに「なぜ……をしないのか」「どうして……をまもらないのか。わからないのか」「それでは……

…を話してみなさい。言ってみなさい」。一方子どもは、親に対し、「……… してほしい。………してくれない」と不満と要求ばかりする。これでは話し合いにはなりません。

親と子の話し合いは、先ず親が子どもを理解しようとする姿勢を示さねばなりません。それをせず、がみがみと要求し、命じることからはじめますと、子どもは、どきまぎし、ますます黙り、言ったところで解ってもらえないときめこみ、親の顔色をうかがって、適当にその場かぎりのことを言うにすぎず、心は別なところにあります。この傾向は、子どもが大きくなるに従って強くなります。

とにかく、話し合いは、親が子どもに対する深い愛情と理解、子どもが親に対する純粋な信頼と愛着、こうした人間関係のなかで、お互いが心と心をふれ合い、通い合わず対話であるといえます。

こうした経験を過て小学生・中学生期になると家事手伝いや食事の折の日常生活のさりげない話し合いのなかや、TV視聴や、一家団樂のなかでの語らい、さては父親の仕事の苦勞話や時事問題、社会問題についての意見の交換、子どもの将来の夢の話し合いのなかで、ほ

んとうの親と子の対話が育って来るのです。

この親と子の対話こそ、よい子を育てる家庭教育の核心であります。(岸田元美「親と子の話し合い参照」)

(45・10・1)

## 子どもの目に注意を

白百合ホームでは、園児の視力検査を最近おこないました。(但し三年保育児はしていません)検査の結果は「健康手帳」にてお知らせした通りですが、この機会に、幼児の目について知っておいて、いただきたいことをお伝えしたいと思い、植村恭夫氏(国立小児病院眼科医長)が書かれた「子どもの目に注意を」という文章を以下ご紹介いたします。

「子どもの目は、形態学的にも機能的にも、生れてから段階的に発達して行くものです。

たとえば、眼球の発達は脳の発達と平行して行なわれますが、生後一年間に最も急速に発達します。その後三才までは比較的速いペースで発達が続く、四才ではほぼ成人の七〇％に達し、一四才ではほぼ成人の大きさになります。機能面で見ますと、視力は新生児では〇・〇二〜〇・〇四ぐらいのもですが、最初の六ヶ月でかなり急速に発達し、〇・二程度の視力になります。その後三才児では〇・五から〇・一〇（約六〇％は一・〇）、五才児では八〇％の子どもが一・〇の視力に達するようになります。そして、就学児の六才では九〇％以上の子どもが一・〇の正常人の視力にまで発達します。

また両眼を一諸に使ってみる両眼視機能についてみましても、ほぼ二才までに大まかを両眼視機能ができ上り、その後、段階的にこれが強められ、ほぼ五才〜六才で正確かつ十分な融像をもち、立体視・深経視を備えた両眼視機能が完成するにいたります。

このように、乳幼児の時代は視力機能の発達する最も重要な時期にあたります。この時期に、その発達を妨害する因子がありますと視力や両眼視機能は発達しないか、また発達しても甚だ不完全なものとなります。



これを実験的に実証したものに、次のような報告があります。生れたばかりの子ネコの眼のまぶたを縫い合せてふさいでおくか、あるいは不透明のコンタクトレンズを入れて数ヶ月おき目をあけてみますと、その眼は全くみえない状態になっています。同じ実験をおとなのネコに行ってみても、視力は全くおちません。このことは、片目の先天性白内性や角膜に、にごりのある病気の子どもを大きくなって手術しても全く視力の改善をみないことでもわかります。また乳幼児に眼帯を長い間して見ますと、その眼の視力がおちてしまいますが、おとなではいくら長い間眼帯をしていても視力はおちません。

このように、発達途上にある乳幼児の目は、外界からの刺激をうけない状態におきますと、視力が発達しなくなってしまいます。この他に、弱視をおこすものには、斜視弱視・不同視弱視・屈折弱視などがあります。これらの弱視は乳幼児期に発見し治療しませんと、学童期にはいつてからでは遅すぎます。

すなわち、視力の発達する時期になおしておかないと後で治療してもなおらないか、なおるにしても長い期間治療を続けなければならなくなってしまいます。

そこで、これらの弱視をどのようにして発見するかが問題です。

第一に、斜視弱視は外見の変化ですぐわかります。

第二の不同視性弱視というのは、片目だけが強い遠視や乱視、また近視があるために良い方の目ばかりを使って、片方の目は余り使わなかったために弱視になるもので、斜視のように外観の変化がないため発見がおくれてしまいます。これは、片目をつぶってテレビやカレンダー、時計などをみせることにより、良い目をふさいだとき、見えないというのですぐ発見できます。

その他、目を細めてみる子、上目づかいでみる子、顔を横に向けてみる子、などはいろいろの目の異常のあることを、大人に示していると受けとり眼科専門医に受診する必要があるります。

以上の通りです。各ご家庭で参考にして下さり、子どもの眼を親が正して観察して、異状があれば適切な処置をしてやりたいと思います。

また、右の目についての文章を読んでいて、ただ目だけにかぎらず、乳幼児期というもの

は、人間にとってきわめて大切な時期なのであるということを、今更のごとく感じました。

幼児期は、その情緒の形成・性格の形成・心の形成・知慧の形成・身体の形成等に於て、かけがえのない大切な時期であります。私たち白百合ホームも、より適切な助けと指導とを園児ひとりびとりに出来得るようにつとめたいと思ひます。各ご家庭に於きましても、人間の一生の間の幼児期の大切さをよく知り、わきまえて下さって、賢明な配慮をその育児に於てなして下さるようお願い致します。

(45・10・21)

69

## 情 操 障 碍 人 間

近頃、人間のいろいろな行動を見てみると、その感情面で気づくことは、きわめて動物的だということ。勿論、人間は動物の一種なので、動物的な面があるのは当然のこと。

となのですが、ものごとの感じ受けとめ方が、ともすると只の快・不快という原始的、かつ基本的なところで止まり、人間だけがもつ人格的、高等な感情である情操的な感覚を失っているかのように思われるのです。

テレビその他のマスメディアの世界に於ける広告などをみていても、人間の情動にうったえ刺激し、情動をあまりたてる類のものが非常に多く、しかも、すこぶる即物的であります。このことは特に広告に限ったことではなく、最近の文化現象一般が、そのような傾向が強いと申せます。

このような感覚的刺激を多量に受けて、日々の生活を営む人間の感情の世界からは、真実なもの、善なるもの、より美しく聖なるものにかかわろうとする洗練された人格的感情、即ち、より高い「価値」に向けられる心の動きである情操が失われてしまうのです。しかし、こうしたゆたかな情操の喪失は人間性の喪失であります。

精神分裂病など精神病と呼ばれる病気の一つの大きな症状は、感情の鈍麻といつて、感情のはたらきがにぶり、人間らしい感情をもてなくなるところにあるといわれます。人の喜こ

ぶことにうれしさを感ぜない。人の悲しむことに悲しみを感ぜない。ましてや高等な情操と  
いうべきものがみられなくなるのです。

今日の人々を見ると、精神分裂病までとはならなくても、人間性を喪失した情操障碍  
人間になっているのではないかと思ったりするのです。

情操の中でも特に宗教的情操は、もっと高い内容をそのうちに秘めているものです。この  
宗教的なものに於て情操が開花する時、人間性は最高に洗練されたものとなるのだと思いま  
す。

しかるに今日、人間の生活の中から忘れ去られ、経卒にとりあつかわれているのは宗教で  
あります。家庭の中から宗教が喪失したということは、とりもなおさず、豊かな人間性の喪  
失を意味し、豊かな情操の喪失を意味するものです。

こうしたことが、人間の生活にどれほど不幸な結果を招来せしめることになるのかという  
ことを、今日の人々は全く知らずにいます。しかし、必ずその結果は刈りとることになるに  
ちがいありません。否すでに、その結果を社会の文化現象として刈りとりつつあり、社会的

な病現現象として現代人を包みつつあります。

この世を合理的・唯物的な考えで割切り、人間の問題を解決しようとしても、それは無理というものです。人間の真の幸福は政治や経済の行使により得られるのではなく、深く心のゆたかさより来るものであります。

私たちは、わが子を育てるに、情緒的にいびつになり、情操に障害をもった人間とすることなきように心がけたいと思います。

私たちの園は、この点に注意を払い、深く幼児の心に美しきもの、優しきもの、誠なるものとしてのイエス・キリストを教え示すことにより、心豊かな人間として成長するように祈り願って、日々の保育にはげんでおります。

## クリスマスの月に思うこと

今年もはや師走月、時のすぐるのを今更のごとくおもひ月です。

それにしても、12月はクリスマス月です。街を行けば例年の如くクリスマスセールはなやかに、わたしどもの購買欲をあをりたて、年の末の気分と合混って何やら落ちつきのない気分にしてしまいます。

戦後クリスマスは、マスコミや商業ベースにのって多くの人々の生活の中に持ち込まれました。クリスマスケーキ・クリスマスツリー・クリスマスカード、人々はそれを食べ、それをかざり、それを送り受けとり、それなりに楽しくすごします。しかし、12月25日すぎればも早やクリスマスはどこにもありません。クリスマスのすべては終わったのです。勿論マスコミや商業ベースが音頭をとり、人々がそれに合わせて楽しくおどったりクリスマスは、それでよいのかもしれない。

しかし、クリスマスを、そのように迎え、送り終らせることは、何としても私しには残念

でならないのです。

と申しましても、すべての人々が教会に集いクリスチャンのようにクリスマスを迎えるべきだ／＼などと言っているのではありません。ただ、みんなで少しでもよいから、クリスマスがなげかけている人間への深い問いに耳をかたむけ、考えてみたいと思ひのです。

「あなたは、自分自身を、見失ってはいませんか」。これがクリスマスの問いの一つです。莫大な消費文化、多量の情報のうず、真実性を失った多様な政治の現実、混乱する教育や道徳……等に人々はふりまわされ、右往左往して、「われにかえり」自分の人生、自分自身を考え省みることを全く忘れることにより、自分を見失ってしまっているのです。

物を多く持つこと、多くの流行の知識を身につけること、政治運動すること、そして肉体的な欲求を充すことなどが、あたかも自分の人生、自分自身を考えることであるかのような錯覚をしてしまっています。

人は時として病床に伏し、その苦痛と戦う時、物も思想も、信頼する友ひとをも、しよせんは自分にとって他人であり、余分なものであることに気づきます。その時人は、はじめて、自



分とは何にか、自分の人生を大切にすることはどうか、という、これまで気づかなかった自分自身の生の現実にもざましめられます。

日常にまいぼつして右往左往している私たちに、「お前自身をとりもどせ」という問としてイエスはお生れになりました。そしてその答えとしてイエスは生き給うたのです。

イエスが私たちになげかけられた問いと答えについて、各々が自分の人生の生きざまを省りみて、少しでも考えはじめる時としてクリスマスを迎え送ることが出来るなら幸いです。

(45・12・1)

## 生命を大切にする生活

「生命を大切にする生活」、これが第三学期の白百合ホームの保育の主題です。

それにしても、今日の社会で恐しいことは、人の生命が非常に経視されているということです。

先日も三才の女兒が幼稚園のテストを受けるのに、自分の名前が読めるようにと母親が、ひらがなを教えていて、なかなか覚えなないので、せっかんのため押入れに入れられた幼児が、ちっ息死してしまつたという事件がありました。

この教育熱心？な母親の行為について、さまざまに批判が出来ると思いますが、私はこの事件を通して、教育とは何か、ということをおあらためて考えるのです。そして今日一般に教育するということが、そこまで行きついでいることに戦慄を覚ゆるのです。

教育、教育教育……と、わが子に熱情をそそぐ親の気持は、わたしにもわからぬでもありませんが、その熱情が子どもの気持を無視し、能力を越えた要求となり、子どもに過酷な重荷を背負わせ、歩くことを要求する鬼のように母親は変身してしまふのです。その結果、先述の如く子どもの生命までも奪うことになるのです。このような事件は特異なことではなく、多かれ少なかれ、今日の子どもは、そう教育状況の中に置かれており、苦しんでいるのであ

ります。

教育の根本に人間を愛し、尊重し、人の生命を大切に作る心がなければ、教育はなりたちません。

人間が人間らしく正しく成長するための業として教育が、人間を軽視し、その生命をいとをしむことを忘れてしまふということは、教育の土台が崩れ去っているということになります。

人間が人間としてとりあつかわれず、物や機械のように利益追求のための道具とされている、ゆがんだ資本主義社会という機構の中に生き、それに奉仕するかのようになっている今日の教育の在り方に何の疑問もいれず、むしろそれを是正し、追従するような考えで生きている大人は、先の幼児を死にならしめた母親を批判することなど出来ないはずで

す。また人は人間を大切に幸福にするためだという名目のもとに、一つの主義や主張、信仰をおしつけることがあります。それらは時として独善的であり、排他的であり、教条的である場合があります。その結果、人間を大切にするとどこか、人間を独善的教条により差別し、

大切にされるのは、その教条を受け入れ、信じる者だけではありません。そんなことが、世界の東西を問わず国家という規模で正々堂々に行われ、正義の政党という名のもので宣伝され、正しい信仰という宗教の名で天下を闊歩しています。しかしそれらは、しょせんは、人間の馬鹿気た独善の利己主義の変形にしかすぎないのであって、そのようなところからは、本当の正しい人間教育など生れては来ません。

人間が素朴に、人間を大切にするという生き方によって来るところは何処にあるのでしょうか。主義によるものではありません。最善だと自認する信仰によるのもありません。ましてや、社会の機構を变革する政治によるものでもありません。

それはほかでもなく、素朴に、素直に人を愛し、生きていることをいとおしむ心、自分にとって価値なきものと思われる、どんな小さなものをも、その存在を認めて、いとおしむ心によるものです。それは主義ではない、主張ではない。素直な人間の心なのです。そのような生涯の生きざまをされたのがイエスであります。イエスは黙ってそのように生きられた、そのように生きることにより、人間が人間にかかわり、人間が物にかかわる、かかわり方を

教えられたのです。それを一口に申しますならば、愛です。

今日の人々にかけているのは、愛についての理屈ではなく、愛に生きることの尊さと力についての体験です。みんな愛の必要は知っています。しかし、愛に生きる尊さとそれがいかほど人間を変革し、すばらしい世界を生みだすものかという愛の力を体験していません。その意味で、先ず、私はイエスの生きざまをみつめたいと思います。それはキリスト教のイエスをみつめるのではなく、イエスその人を見つめるのです。そうすることにより、人間として生きる勇氣と希望を学びとり、得られ、みつめる者のうちに変革が生じるにちがいないと思います。そして、そこで得たものが、教育の根本とならなくては、人間教育は完成しないと信じています。

## 共に一歩一歩あゆむ

子どもたちと一生懸命あゆんでいるうちに、はや三月を迎え、子どもたちを新しい世界へ送り出す時が参りました。

かつて入園式の日、わたしたちをみつめた不安と弱さの、あの目なごしは何れの子どもからも消え、楽しい集団生活を経験した子どもたちは希望に胸をおどらせ、自信に満ちて新しい世界へ前進しようとしています。

身体も知恵も心も大きく成長したことを、一枚一枚貼って行く卒園アルバムをみながら、しみじみとおもひ、「ありがとうございました」、と自ずと神への感謝の言葉を心のうちでつぶやいてしまいます。

それにしても、人生の歩みは、人が人間へと成長する途上だと思えます。その歩みを止める時、人は精神的に死ぬか、肉体的に死ぬかのいづれかです。

人は常に新しい経験、新たななる人との出会いにより新しい世界を発見し、自分を豊かな

人間へと成長せしめます。

子どもは、家庭の中だけという古い世界から、同年令の自分とはちがった他人の集団という新しい人間関係の中に入り、自分の存在というものを認識させられ、又自分とは異った他人の存在ということを認識させられました。悲しいこともあったでしょう。くやしかったこともあったでしょう。心のうちで一生懸命がまんしたこともあったでしょう。つい自分の氣持に反して、手が動いて相手を泣かしてしまったこともあったでしょう。先生から叱られたこと、友だちからのけ者にされたこともあったでしょう。

しかし反面、親と一諸にゐる時よりも、物を買ってもらった時よりも、また好きなものを食べた時よりも楽しくて、うれしかったことを友達との遊びの中で、いたわり、思いやりの中で、また先生との間で数多く体験したにちがいありません。

幼児たちは、こうした数多くの友人との出会、様々な出来ごとを通して、人としての在り方を学習し大きく成長を遂げました。そして、それを土台とし、さらに、もう一つの大きくて新しい人間の世界へ進み行こうとしています。身心共にその備えは出来ました。そこで彼ら

は園では経験しなかった喜びしきこと、悲しいこと、驚ろくべきこと等々を知り、いよいよ成長し、止まることなく、どんどん進み行くにちがいありません。止まつてはいけません。親は止めてはいけません。確実に、その時々歩み、一歩一歩のあゆみを、よしあしにかかわらず体験し乗り越えさせるのです。そして自から人間としての基本的な在方を、その時にふさわしく学ばせるように指導しなければなりません。

私たち教師は、このことを常に心にとめて、わたしたちの配慮できる限りのことをやってみて参りました。しかし、わたしたちの人間的な未熟から、充分なる配慮に欠けた点も数多くありました。今となってはどうすることもできずお許しを乞う次第です。私たち自身も人生の途上にある一人として、今後大いに努力研さんしてゆきたいと思えます。

私たち教師は、子どもたちの前に教える者として歩んでまいりましたが、教える以上に子どもたちとの交わりのうちで、数多くのことを学ばせていただきました。そのことを今深く感謝するものです。

今や、子どもたちは、わたしたちの直接手のとどかない世界に、はばたいて出て行きます。



わたしたちも、子どもたちが成長すると同じように、人間として成長しつづけたいと願っております。

最後に、ご家庭のかたがたの長らくのご協力に感謝し、皆様の今後の健康と平安とを祈りつつ、最後の保育通信をおとどけいたします。

(46・3・10)

## 保育内容と幼児

新入園児の保護者の皆様、お子さまのご入園おめでとうございます。

また、ゆりぐみ、すみれぐみへと進級されました園児の保護者のみなさま、今後とも一諸にお子さんの成長を愛をもって見守ってゆきたいと思えます。

さて、今月は園に於ける保育内容について考えてみましょう。

幼稚園に於ける保育内容は、小学校に於ける教科の初歩のように考へてはなりません。幼児期はすべての面で未分化であり、発達の個人差がいちじるしいために、一つの内容を順序だて一般的にいっせいに教えることは不可能です。特に知識や技術を指導することは困難であり、知識や技術を優先させるならば、発達過程に重要な問題をひき起しかねません。

幼児を保育していく上で優先すべきことは、その芽ばえを養うことです。たとえば、音楽という保育内容は、その基礎に養われなければならないのは音楽性であり、音楽を愛する心であります。その音楽をたのしみ、感じ、何らかの形でそれを生活の中にあらわそうとする意欲を、そだてなければなりません。単に歌が上手に歌えるとか、楽器の演奏をうまくやっ  
てのけるという子どもでなく、音楽が彼らの生活にとって意味のある価値の高いものとなる  
ような教育をめざしていなければなりません。また、自然観察や社会研究でも同じで、自然  
界や社会に関する知識を、何となく頭で多く知っていると  
いうのではなく、自然界や社会の  
事象の見方・感じ方が美的に、宗教的に、情熱的に発達するように、あるいはその態度が社  
会的・科学的となるような素地を整えてやらねばなりません。このことは絵画に於ても同じ

で、上手に絵が画けるといふことが目的ではなく、一口に言えば絵どころが育てられるといふことが望ましいのです。また、「ありがとう」、「おはようございます」といった言葉の指導も、感謝する心、人に信頼感をもつ態度が育っていないならば問題であります。ついにながら健康といったことについても、幼児らが現在また将来健康ですごすために大切な考え方や習慣や態度が訓練されることが望ましいのです。

右のような基本的な問題を育てることに深い配慮が特に幼児教育には必要です。そして子どもの成長発達過程に、それらの芽ばえがさまざまのかたちで現れて来ることをよく知っておかねばなりません。そして、これらのことは、幼児に於ては生活の中で具体化されるのです。即ち、幼児同志の遊びに於てそれらを体得してゆくのです。

少しむつかしくなったようですが、要するに、お母様がたは表面に見えるカッコイイ動作や知識としての言葉や文字等に関心をうばわれ、ふりまわされず、保育の内容が意図している教育的配慮を深く理解して下さりご協力をお願い致します。

## 幼児期の「うそ」

わたしたち大人にとっては、「うそをつく」「事実と違うこと」を承知の上で、他人を欺くためとか、自分が得をするために「故意」に言うことをさします。

つまり「事実と違うこと」を言うことと、「故意」に言うこととの二つが「うそ」の本質であります。

ところが、幼児はこの「故意に」ということを、ほとんど意識していませんし、「事実と違うことを言う」意識もまだないようです。

それでは、幼児はどういうことを「うそ」と思っているのかと言うと、「うそ」と「悪いことば」とを混同しているようです。

「うそとはどんなこと」と幼児にきくと、「悪いことを言うこと」と答えます。これは、幼児がうそを意識して言っているのではない、という点でもあります。

幼児には、ある時期になるまで、ほんとうのことと、うそのこととの区別がありません。

空想と現実とを混同しています。「こ・う・あ・り・た・い・な・あ」、「こ・う・し・た・い・な・あ」と思い想像したことが、いつの間にか「こ・う・な・つ・た」、「こ・う・し・た」という現実と混同されてしまいます。幼児はこのように、自分ではなにも意識しないで、空想したことを現実のように話してしまふのです。

ところが、大人は幼児のこんな話をきくと、「うそを言った」といって叱ります。けれども幼児には「うそ」の意味がわかりませんから、大人がなぜ叱ったのか、禁止したのか、ちっともわからない。そこで彼らは全く表面的に考えて、「口をきいて叱られたのだから、口をきくことに悪いことがあるのだ」と解釈します。また一方で、幼児はたいして悪意もなく、おもしろ半分が悪いことばを言ったことにも、大人がら叱られます。幼児自身は「うそ」も「悪いことば」も、共にほとんど意識せずに言っているにもかかわらず、どちらの場合も、大人から叱られます。このような経験が、「うそ」と「悪いことば」とを混同するものになるのです。

このように、うそのほんとうの意味がわからず、うそを悪いことばと混同する時期は五・

六才までですが、八・九才になると、うそを「事実と違うことを言うこと」と考えるようになり、一〇才以後になると、だいたい私たち大人と同じようにそれを「故意に事実と違うことを言うこと」と定義するようになります。

とにかく、幼児は大人から「うそをついてはいけません」と言われたから、そう信じているだけで、うそをつくことの害悪を知って、うそを悪いと思っているではありません。ですから、「なぜ、うそをついたらいけないの」ときくと、「お母さんに叱られるから」とか「神さまに罰せられるから」とかいう理由をあげるのです。

紙面の都合上、幼児のうそについての特徴だけしか記せませんでした。幼児の未分化性を知ってやさしく暖かく「うそ」にはかかわってやりたいものだと思います。

(46・6・1)

## 今日の教育を考える

目的のための手段が目的のようになってしまい、本来目的だったことが忘れられてしまふ、ということ、いろいろの場合によくあることです。このようの場合に、「わたしは、何のためにこんなことをしているのだらうか」と考え込んでしまふことになります。

このことは、「教育」についても言えることです。特にわが子を教育する責任をもつ今日の親、それに学校教育の現場で直接子弟の教育にたずさわる教師、さらに政府の文教政策をつかさどる官僚たち等の姿勢をみると、このことを痛感します。

親たちは目先の成績ということだけ考えて子供の教育に熱心にかかわり、教師も時として自分のクラスの平均点を上げることに関心をうばわれ、文部省も変りやすい時代の要求・要請にふりまわされています。それらに共通していることは、人類の未来・個人の将来・国家百年の計にもとづいたわが子の今日の教育・子弟の今日の教育・国民の今日の教育目的がないということ、ないしは目的を忘れてしまつてゐるといふことです。

目的がなく、目的を忘れ去つてただの手段が目的と化してしまつた今日の教育は、何のよきものも産み出しません。

本来手段としての学習が目的となって利益を得るのは、「学校屋」だけではありません。小は幼稚園や塾から、大は大学校に至るまで教育産業として利益追求に専心することになります。正に、今日の日本の社会からは「学校」なるものは姿を消したと言わざるを得ません。

それにしても、よく考えてみると教育の目的が喪失して手段が目的化してしまった、というより、目的そのものが元来目的として、その内容が貧弱といましようか、浅薄といましようか、形式的で無内容なものといましようか、人間教育の目的として、かかげる程の価値高き理念では元来なかつたのではないかと思われまふ。ですから、手段が目的にとって代えられてしまったのだと考えられます。

このことは、実は重要な人間の生き方の問題と深いかわりをもっているのです。つまり今日の日本人が自分の生の価値基準として確かなる原理・根拠をもっていないということです。謂うなれば、自分の生活・人生というものを、ただ目先きの物質的な豊かさ、肉体的な快・カッコよいことなどを求めて、自分の行き先を明確にわからぬまま、さまざまに生きていくということ。実に今日の教育の問題は、今日の人間の在り方、生き方そのものに内



包されている人間そのものの問題だと言えます。ですから、「あなたのお子さんの教育の目標は」と正面切って問われても、世の親も教師も文教行政にたづさわる者も、まともに答などもちあわせていません。「清く明るく、正しい子ども」などと、どこかある広告の文句のような、歯のうくような無内容をたて、ま・え・論を語るだけです。

問題は、ただ教育論ですますことの出来ないということに気づきます。教育の不在は、人間が生きるという根拠をどこにももっていない、ということとです。理屈は並べたてることは出来ます。よそより借りて来たものでまにあわすことは出来ます。しかし大切なのは、自身のもので自分の人生を生きること、考えることです。その時、他の人はどうであれ、自分の人生の目的は自ずと明確になり、手段もそこから考え出されることでしょう。

人間は正しい信念を土台にして、自分の理想とするところを画き目標とすることが出来ます。

結局、今日の教育不在ということとは、今日の人間が自分の生の確かなる依りどころをもっていない、ということであると共に、自分の人生の理想を失っているということに根本的

困があります。ですから、手段だけが浮き上り、それがあたかも目的であるかのように人をまどわすのです。これは文化の退廃を意味し、思想の貧困を意味しています。そのような国家や民族は遠からず滅びるにちがいません。

今日は、こうしたことを、自分に照らして考えてみたいと思います。

(46・6・1)

## 感謝のある生活

長かった夏休みも終り、二学期がはじまりました。保護者の皆様お元気でいらっしゃいますか。白百合ホームの二期期の主題は表記の通り、「感謝のある生活」です。

ものが乏しい時に、わずかなものでも、与えられるとうれしい、よかったと思うものです。これは、戦中戦後のあの生活をしたものは、身をもって経験したことです。それならば、

いろいろなものが豊かになつた今日、何倍かうれしく感謝できるはずですが、仲々そうはゆきません。物が豊かにあればある程わたしたちは、それ以上を望み他と比べて不平を言うようになり、不足感を感じるようです。お金が万能になり、経済面がゆたかになると、わたしたちの心は貧しくなり、低くなってゆくように思えてなりません。

どうやら、物質や経済の豊かな成長は、わたしたちのもっとも大切な人間らしさを失なわせてしまふようです。

このような大人達の精神的な状況の中で生き育っている今日の幼児の心からも、「ありがとう」という感謝の心、感謝の言葉をうばってしまうのも当然であります。

このことは、決してどうでもよいことではなく、大変なことが起っているのだ、ということに気づかねばなりません。

人間の心から、感謝の心が失せてしまふならば、豊かな人間関係は無くなってしまいます。人間社会の潤滑油は、お金でも法律でもなく、愛であり、その愛とは相互に感謝する心をもつこと、ものごとの関わりに感謝する心をいざくことです。

幼児が、自分たちが毎日安心して安全で快適な生活をする事が出来るのは、実は、いろいろな時や所で、一生懸命だれかが働き、支えていてくれるからであり、それらのおじさんやおばさんたちの働き一つ一つが、すべて自分に深く関係しており、それらのことを自分ひとりで全部やろうとしたら、とても大変で出来ないのだ。それ故に、それらのおじさんやおばさんがいることは、ありがたいことなのだ、ということを知って、人は相互に助け合いながら毎日を生きて行くのである、ということを知って成長して行くことは、平和で幸福な社会をつくる基になります。

しかし、「そんなおじさんやおばさんは、お金をもらっているのだから、働くのはあたりまえでしょう」、と思う心の幼児がもって成長して行くなら、将来のその国の社会は、物質的にどれ程豊かになっても、不幸と悲しみに充ちたものとなります。

私たち大人は、このこれらのことをよく弁えて、幼き時より感謝する心を子どもにうけつければなりません。

また、これからの季節はクリ・リンゴ・カキ・ミカン・ダイコン……等が収穫される時で

あり、自然界の秋は春夏の働きを終え、冬の一休みする前に美しさをみせます。こうしたことでも、あたりまえだ、と思ひ見すごしてしまふのではなく、そのゆたかな稔りと美しさに驚ろき、深く「ありがとう」「うれしいね」と感謝し思ひ心を、幼児の心に充してはぐくみたいものだと思ひます。そうする時、将来、決して自分たちの利益追求のために、自然を人間の権利のように破壊するようなことは、しなくなるにちがいありません。

最近ますます、幼児の知的開発ということが盛んに唱えられ、世人も国もあれやこれやと論じ計画を次々と出しています。

しかし、他人を思ひやり、自分の周囲のものに感謝する心を失った人間の上に、いかほどの知識をのせたとして、人間の社会は決して平和にも幸福にもならない、ということを知って、幼児と共に「感謝する生活」ということを、各ご家庭でも、今学期の目標としていただきたい願っています。

## 親と子と教師と

人間は、ひとりで生長するものではありません。人間は他人とのかかわりひととのかかわりに於て生長するのです。

第一に、良き親とのかかわりかかわりに於て。第二に、良き教師とのかかわりかかわりに於て。第三に、良き友とのかかわりかかわりに於て。更に第四に、さまざまな出来ごととのかかわりかかわりに於て。人は良き人間へと生長してゆきます。

その子を見れば、その親がわかる、とよく言われます。それほど子は親の感化を受けて育ちます。子のよりよい生長のために、良き師・良き友を選ばねばならぬ、と言われるのも、そのかかわりかかわりに於ける感化が、子の生長に大きい影響を与えることを言っているのであります。

特に幼児期は、親と共に在る場合が多く、従って、親からうける感化は決定的となります。幼児にとって、その家庭は学習する学校であり、親ははじめて出会う教師であります。

「三つ子の魂、百まで」「いろはの筆勢、百までぬけぬ」とは、この最初の人間の学校である家庭の教師である親の感化の決定的なことを言っているのだと思います。

親が子に感化することがらは、ものごとに対するかかわり方の姿勢です。即ち、感謝する心・喜ぶ心・やさしい心・勇氣ある心・忍耐する心・思慮深い心・落ちついた心……そのすべてを自分の心として学びとる基本は、その親の心とその生活の姿勢からです。

子は、親の表べだけの言葉や行動からでなく、日常のさりげない言葉や、その深い心を学びとるのです。学ぶとは、まねるといふことです。

狭い意味での教育は、専門の教師にゆだね、親はその子の心の教育・生活の知恵をこそ家庭に於ける子どもとの関わりの中で教え与えねばなりません。にもかかわらず、今日の親は、子の教育こそ親の唯一のつとめとばかりに思い込んで、金と時間とをかけてそれにはげみ、親の子に対する唯一の責任であり、義務でもある心の教育を忘れ去る愚を犯して平然としています。そこでは、すでに親と子は断絶し、家庭の機能は健全に働いているとは申せません。今日の親は、先ず己れ自からの愚かに気づかねばなりません。多くの知識をもっている

いうことと、豊かなる心をもつということとは本質的にかかわりはありません。

他人との付き合いに於て、非常識で、心ない言動を平気で犯し、一向にかえりみる気持のない無知なる親がいます。わが子の教育は先ず、母親自からの強い自己批判からはじめなければならぬと思うのです。

世の親達が、自からの人間としての心の豊かさ、熱心に配慮し、成長するならば、その国の政治の愚かさも、教育行政の誤りも、幼稚園や小学・中学・高校・大学校等の経営者や教師などの、いいかげんを教育姿勢を根本的に正す、偉大な力と必ずなるのです。

親が豊かに成長すれば、子も豊かに成長しますし、教師も成長させられます。そして世の中は必ず変革されます。

皆さん、共に豊かに人間として成長するために、今日もはげみたいと思います。



## 今日の親が子どもにもつ責任

「現在は、性能と経済性の価値観だけで動いている」といわれます。

すべてのものを、それが、どれ程の性能といかほどの経済性があるか、という尺度で計算され、その価値の高低が決定されるということです。

こうしたことは、わたしたちがテレビのコマーシャルを見る時、いやをうなしに見せられ、聞かされます。即ち、「これほどの内容あり、カッコイイものが、こんなことで買える」といったコマーシャルです。人々はそれを見せられ、聞かされることにより、それを自分で用い、消費すれば、生活は今よりもっと豊かになり、幸福になれると思うようになるのです。

こうしたことを、来る日も来る日も見せられ、語り聞かされているうちに、わたしたちは知らぬ間に、何ごとも、性能と経済性とカッコヨサの尺度でもって、その価値を計り決定してしまいう習性を、うえつけられてしまふのです。

こうした価値の基準をうえつけられた現代人は、自分の欲望をそのようを価値で充しくてく

れるものは、何でもよいもの、幸いにしてくれるもの、として取り込み、そうでないものは、よくないもの、幸いにしてくれないものとして、すててかえりみなくなってしまう。このような価値基準で動く人間のことを所謂、エコノミック・アニマルと呼ぶのです。そして、このようなエコノミック・アニマルのおそろしさは、常に物をそのような価値基準で見ている間は未だよいのですが、人間をも、そのような性能と経済性の価値基準で計り見てしまうようになった時です。

ところが、すでに現代のわたしたちは、物だけでなく、人間をも、その価値基準で計り、計られ、評価し、評価されているのです。これは恐ろしい出来ごとが、すでに起り、はじまっているということです。

そして、教育の世界にもこの価値基準は入り込んで私たちを支配しているのです。

例えば、性能のよい頭脳をもち、経済的によくかせぐ者が偉い人間のように信じられています。世の親たちは、そのような人間になるために、吾が子を教育することに熱心になります。そのような人間を多く産み出す学校が有名校、一流校なのです。全く馬鹿気たことです。